

サクソフォンの楽器発達史における奏者の使用楽器 ——シガード・ラッシャーとマルセル・ミュールの比較を中心に——

Instruments Used by Saxophonists in the Development History of Saxophone Instruments:
Focusing on the Comparison between Sigurd Rascher and Marcel Mule

黒田真帆
KURODA Maho

キーワード：シガード・ラッシャー、マルセル・ミュール、サクソフォン、楽器史

1. はじめに

本研究はクラシックサクソフォン史において楽器の開発の黎明期から全盛期に至るまで特に際立って活動していた2人の奏者、ドイツ出身のシガード・ラッシャー¹ (Sigurd Rascher, 1907-2001) とフランス出身のマルセル・ミュール² (Marcel Mule, 1901-2001) の、フラジオ奏法に対する考えの違いや使用楽器を比較したものである。まずエピソードや発言から、2人のフラジオ奏法に対する考えの違いを整理し、それぞれが音楽において優先したと思われることと、それによる後世への影響などを考察した。また2人が使用していた楽器から、なぜその楽器を使用したかを証言などをもとに考察し、それぞれを比較した。

結論から言うと、フラジオ奏法においてはラッシャーは進歩的であったが、ミュールは保守的であった。しかし、楽器発達史と奏者の使用楽器を整理し、2人の使用している楽器を比べると、使用楽器においてはラッシャーは保守的であり、ミュールはラッシャーとは違って多くのメーカーの楽器を渡り歩いていたことが分かった。

本文で、「クラシックサクソフォン」という言葉を使用しているが、サクソフォンは一般的にジャズのイメージが強いため、ジャンルを明確に示すためにそう呼ばれることが多く、本研究では分野のことを指すこととする。

2. ラッシャーとミュールのフラジオ奏法に対する考えの比較

2-1. フラジオ音域が登場した経緯、2人のフラジオ音域に対する意見の相違

ラッシャーは、クラシックのサクソフォンのためにたくさんの作品が書かれはじめた頃、フラジオ奏法³を積極的に取り入れることで表現の拡大を目指した。そして最終的に4オクターブもの音域を獲得し、彼が委嘱に関わることで、フラジオ奏法が用いられた曲は急激に増えた。ラッシャーは常に作曲者には挑戦的に作曲するようにと依頼していたそうだ⁴。しかし、当時は彼以外にフラジオ音域を演奏できる奏者はいなかった。ゆえにラッシャーが委嘱した曲の中には、名曲であるにも関わらず高音域の演奏が困難であるために難曲となり、演奏される機会が減ってしまった曲が多数存在する。

私自身、ラッシャーが委嘱した名曲であるマルタンの《バラード》やラーションの《コンチェルト》を演奏したいという気持ちを10年以上持ち続けているが、納得の行くソノリテでフラジオ音域を演奏できないため、いまだに演奏出来ていない。フラジオ音域に果敢に挑戦したり、フラジオ奏法やハーモニクスについて研究することは素晴らしいことだが、その音が出たことで満足したり、その音を出すことだけに価値を置いたりすることは避けなければならない。フラジオ音域を出すことよりもまず、正規の音域で安定していい音で吹くことに価値を置くべきであると私は考える。当時、今よりも発展途上であったクラシックのサクソフォンに対して、難易度が高いフラジオ音域を取り入れようと尽力したラッシャーは、かなり進歩的であった。

一方でミュールは、フラジオ奏法に関しては保守的な考えの持ち主で、無理にフラジオ音域で演奏する必要はないと考えていた。ミュールが委嘱に関わったほとんどの曲は、フラジオ音域が含まれず、今も尚クラシックサクソフォンのレパートリーとして世界中で演奏され続けている。ただミュールが一切フラジオ音域を演奏しなかったわけではない⁵。ミュールの影響力を考えると、ミュールがフラジオ音域を積極的に演奏していたら、他の奏者たちも同じようにフラジオ奏法を演奏し、それが主流になっていった可能性が高い。後世への影響も考え、無理をしてフラジオ音域に挑戦することによって、サクソフォニストたちが音楽的でない演奏になってしまうことを防いだのではないだろうか。

2-2. イベール作曲の《コンチェルティーノ・ダ・カメラ》

ラッシャーがイベールに委嘱した《コンチェルティーノ・ダ・カメラ》のフラジオ音域に対し、ミュールが後タイベールに助言したことで、フラジオ音域に「8va ad lib.」と付け加えられたという有名なエピソードがある。これはミュールの助言によって、フラジオ音域が1オクターブ下で演奏されることが許可されたことを意味する。ミュールはそのことについてユージン・ルソー氏⁶との対談⁷で詳しく語っているので紹介したい⁸。その前にイベール作曲の《コンチェルティーノ・ダ・カメラ》がどのような楽曲であるかと、曲の中のフラジオの割合を伝えるために曲についての補足を入れる。

名称：Concertino da camera pour saxophone alto et onze instrument (仏)

アルト・サクソフォンと11の楽器のための室内小協奏曲 (日)

作曲者：ジャック・イベール (Jacques Ibert, 1890-1962)

出版年：1935年

編成：独奏アルト・サクソフォン、フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、トランペット、ヴァイオリン2、ヴィオラ、チェロ、コントラバス (ただし弦楽器は、コントラバスを除いて多少増やすことが可能)

構成：第1楽章 Allegro con moto、第2楽章 Largetto - Animato molto

分数：約12分⁹

曲の中のフラジオ音域の割合：第1楽章では、208小節中3小節間にわたって3箇所、第2楽章のLargettoでは54小節中6小節間、Animato moltoでは226小節中カデンツァの最後に1箇所。それぞれ曲の中の決め所でフラジオ奏法が用いられ、1オクターブ上の高音域で演奏する

か、そのまま演奏するか、奏者が選べるように記譜されている。

R. あなたがイベールのコンチェルティーノ・ダ・カメラを知るようになったのは、どんな経緯からですか？

M. (ヴェローヌのコンチェルトという曲のレコーディングセッションをイベールが聞いた際に)、イベールがヴェローヌのコンチェルトの演奏について、大変好意的な評価を聞かせてくれた後、イベールは自分がコンチェルティーノを書いたこと、それを私の演奏で聴いてみたいということを私に言ったのです。そういうわけで彼は楽譜を持ってきてくれて、私は練習を始めました。

ところで、シガード・ラッシャーがこの曲のために、イベールに作曲料を払ったことは本当です。そしてラッシャー氏がこの曲に対して、一年間の独占権を得たことも知っています。にも関わらず、フランスのラジオ放送で、私がこのコンチェルティーノ・ダ・カメラをオーケストラ伴奏できるように取り計らってくれたのです。

R. その時、ラジオ奏法の部分は上げないで演奏されたのですね？

M. それが自分の望む唯一のやり方であることをイベールに告げてから、ラジオ奏法なしでこの作品を演奏したのです。彼は、自分にとってはこれで満足であり、高音域には固執しないと語りました。1970年、ジュネーブでの国際サクソフォンコンクールの時にラッシャー氏と話した時に、このことについてのイベール自身の見解を彼に知らせました。このコンクールでは、多くの出場者がラジオ奏法を全く用いずにコンチェルティーノ・ダ・カメラを演奏しました。ラッシャー氏はこれについて、演奏者がラジオ奏法を全く用いずに演奏したのは正しくないと言って、私に不満の意を表明しました。しかし私は彼にこう説明しました。イベールが私に対し、この点に関しては自分がラッシャーから委嘱を受けた時とは完全に考えを変えたと話してくれたのだと。イベールは、彼の作品を高音域を使って演奏したいと望む人たちに対して反対はしませんでした。コンチェルティーノ・ダ・カメラをおおやけの場で演奏する際、高音域を使うことは決して必要ではありません。楽譜を注意して見ると、それぞれ高音域の場所に「ad libitum」と記されているのが分かるでしょう。これがこの問題に対してのイベールが感じていた正確なところであり、疑いの余地はありません。

この対談から、ラジオ音域に対する2人の意見の相違がはっきりと感じられる。この曲の名演によってミュールは名を上げたが、もしラジオ音域に「8va ad lib.」が書き加えられていなかった場合、ラッシャーが委嘱した他の曲と同じように難曲となってしまう可能性も考えられなくはない。ラッシャーは、イベールの意向を知った上で、なぜそこまでラジオ奏法で演奏されることを望んだのだろう。彼は自身が書いた教則本で、ラジオ音域を奏することの重要性について語っている¹⁰。

2-3. ラッシャーが語るサクソフォニストがフレンジオ奏法を演奏することの重要性について

本書を出して以来、私はハイ・レジスター¹¹をマスターしようとする多くの真剣なサクソフォン・プレイヤーたちと語り合ってきました。そして例外を除き、インナー・イヤーズ＝頭の中で音を聴く（想像する）能力、トーン・イマジネーション＝音をイメージする能力、コンセプト・オブ・トーン＝自分が出したい音の明確なコンセプトといった事柄の重要性を理解出来ていない生徒たちは、ハイ・レジスターを独力ではマスターできていないということが分かりました。一方、それらの内面的な要素を理解できていて、身体的な要素（アンブシュア、フィンガリングなど）と組み合わせることができる生徒たちは結果的に成功しています。つまり、私たちは時として、内面的なものがもたらすパワーを過小評価し過ぎているのです。

全てのオーバートーン（倍音）及びハイF音より高い音を出すためには、様々なファクターが必要です。正確なピッチを出すために明確な目的意識（各プレイヤーの内面にある意識）、フレキシブルかつバランスよく鍛えられたアンブシュア、適切にコントロールされたエアの使い方などです。このプロセスは歌を歌う動作と非常によく似ています。あるトーン（ピッチ、強弱、声質、カラー、キャラクターなど）を意識してそのように歌おうとすることは、それに相応しいエアの使い方です。声帯をそのように機能させることにほかなりません。心の中に起こった目的（あるいは欲求）が、あなたの意識となるのです。これらのことを踏まえると、ハイ・レジスターをマスターするためのプロセス自体は身体的なトレーニングかもしれませんが、あなたの心（あるいは頭）が意識する明確な理解があって初めて成立するものであると言えます。

同様に、管楽器プレイヤーの内面的な部分はサウンド・メイク（音色創り）にも直結します。あるプレイヤーが十分に鍛えられたよいアンブシュアを備えているのであれば、内面的な欲求（意図的に行おうとすること）に答えることができるでしょう。次のステップは、数ある選択肢の中から欲しい音を選び、その音を認識及び決定することです。これらの動作（または判断）も、やはり内面的なことです。従って、私たちは常に内面というスターティング・ポイントに立ち返ることになるでしょう。そして最終的なゴールは、あらかじめ出したいと思っていた音を実際出すことができるという領域に達することです。

インナー・イヤーズ、フレキシブルなアンブシュア、エアのコントロールなど向上させ認識するためのエクササイズが次の数ページにわたって掲載してあります。それらを正確にこなすことで、上達ができるでしょう。

今日のアマチュア・プレイヤーを見ていると、ある特定のキー及びレンジに限定してサクソフォンを演奏しているように思えます。そしてハイ・レジスターを体系的に学んでいる生徒たちには、それによって通常のレンジにおける音質や演奏スキルも必ず向上するという効果が認識されるようになりました。すなわち、ハイ・レジスターの演奏に要求される繊細かつ多彩なトーン

ン・イマジネーションは、通常のレンジにおいても重要であるということです。イントネーション、トーン・クオリティ、ミュージシャン・シップ、芸術性などは全て、あなたの内面に存在する音を実際の音に投影させるために必要な要素です。それらがなければ、私も自分の内面にあるものをリスナーと共有することが出来なんでしょう。この投影するものは、簡潔かつ明瞭である必要があります。学ぶことによって身につけましょう。

この言葉は自身の教則本の出版に寄せた前書きである。ここからは、ラッシャーがオーバートーン及びフラジオ奏法に対し深く洞察し、それがいかに奏者の技術だけでなく演奏における内的要素の向上にも繋がるか、その重要性について語っていることが分かる。ラッシャーは、オーバートーン及びフラジオ奏法に真摯に取り組んでこそ、サクソフォン本来の音色を獲得できるという考えだったのだろう。

3. 楽器発達史

3-1. 楽器史について

この節では、サクソフォンの楽器製造における大きな流れを説明したい。

サクソフォンはベルギーの楽器製造者であるアドルフ・サククスによって発明され、1846年に特許を取得した。発明当時のサクソフォンは現代のものと異なり、音量は小さく、簡素な造りをしていた。そして、その後各国の軍楽隊に採用され、1866年にはAdolphe Sax社の専売特許が失効すると同時に、Buffet Cramponなどの大手メーカーもサクソフォンを作り始めた。

そして、20世紀初頭のアメリカにおいて、サクソフォンはジャズやジャズ以前のポピュラー音楽といった分野で爆発的に人気が出る。その需要や奏者たちからの要求を受け、Buescher、Conn、King、Martinといったアメリカのメーカーにより楽器が改良され、大量に製造された。

その後、1929年にAdolphe Sax社を買収したフランスのSelmerというメーカーが、1936年に画期的なキィのメカニズムを持つBalanced Actionという革新的なモデルを発売し、ジャズの奏者たちはこぞってこの楽器を使い始める。このメカニズムの特許は、1970年まで守られていたため、他のメーカーはこのメカニズムを持つサクソフォンを作ることが出来ず、それに対抗するようなモデルを作ったものの、次第に衰退していった。そのため、現代ではSelmerが発明したメカニズムを持つサクソフォンが主流となっている。

このように、Adolphe Sax社が作った楽器が、ジャズの人気と共にアメリカで改良され、その後フランスのSelmerがつくったBalanced Actionというモデルの登場と共に、Selmerが発明したメカニズムを持つサクソフォンが主流となり、アメリカのメーカーが作った楽器は次第に衰退していった、という流れがサクソフォンの楽器製造における発達史の大きな流れである。

3-2. SelmerのBalanced Actionのキィメカニズムについて

サクソフォンの楽器史においてSelmerのBalanced Actionの登場がターニングポイントであることは間違いない。この節ではその画期的なメカニズムについて簡単に説明したい。まず、サクソフォン

の製造の歴史において、そのメカニズムや形の違いといった観点から大きく時代を3つに区分することが出来る。

①ダブルオクターブキィ、低音キィ左側配置の時代（1844～1888）

この頃の楽器は、音孔の数が現在の25個に比べ18個と少なく、変え指が使用できないこと、またダブルオクターブキィの影響によって、音域ごとにオクターブキィの使い分けが必要であり、速いパッセージが演奏しにくいなどの難点があった。

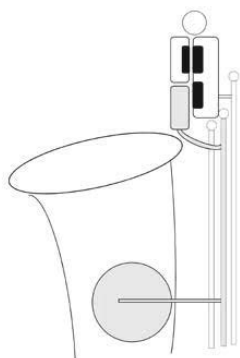
②シングルオクターブキィ、低音キィの対向配置、または低音キィの左側並列配置の時代（1888～1936）

この頃からシングルオクターブキィが主流となる。それにより、速いパッセージの演奏が可能になった。しかしこの時代の楽器は、①の時代に比べ音量や吹奏感は向上したものの、発音にムラがあり、キィアクションが頼りないことなどの欠点が問題視されていた。また、最低音が拡大され、左手のB♭トリルキィ、右手のB♭トリルキィ、フロントFキィなどが次々と考案されるなどの、改良がされた。

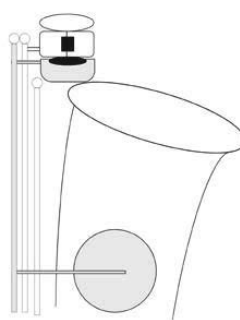
③2つの低音キィの右側並列配置の時代（1936～）

アドルフ・サククス社を買収したセルマーが、Balanced Actionという画期的なキィシステムを持つサクソフォンを1936年に発売したことが始まりである。低音キィの軸の回転方向を見直すことにより、構造がシンプルになることで、今まで問題視されていた音のムラが解消され、どの音域でも均一な音色で演奏することが可能になった。

このように構造の違いから大きく3つに区分することが出来る。次に低音キィが右側並列配置され、キィ軸の回転方向を見直されるとはどのようなことなのか、図を使って簡潔に説明したい。



(左) バランスドアクション以前のテーブルキィ



(右) バランスドアクション以降のテーブルキィ

まず低音キィの開閉を行っているのは、テーブルキィである。黒く塗ってある部分は最低音のキィと音孔、それに伴って回転する連結バーである。低音キィの音孔が左手側から右手側に移動したと同時に、これら进行操作するテーブルキィとを繋ぐ連結バーの場所と形も変わった。よって、構造がシ

プルになり小指の移動距離を小さく抑えることが出来、スムーズな操作が可能となった。

3-3. 楽器製造年表

本節では具体的にどのメーカーの何というモデルが発売されたかを整理していきたい。

下の表は、1846年～1970年の間にサクソフォンの楽器製造を行ったメーカーが、いつどのようなモデルを発売したのかを表にしたものである。また、この時期にサクソフォンを製造したメーカーは表以外にもあるが、次の章で紹介する著名な奏者に使用されていないメーカーは、影響力が少なかったと判断し、これらのメーカーを主要と表した。

主要なメーカーの発売モデル

	Adolphe Sax (仏)	Buescher (米)	Conn (米)	King (米)	Martin (米)	Selmer (仏)	Couesnon (仏)	Buffet Crampon (仏)
1846	特許取得							
～								
1866								Buffet Crampon
～								
1887								Evette-Schaeffer
1888			Worchester					
1894		True tone						
1910								Apogee
1915			New wonder					
1919					Handcraft			
1920				Voll true				
1921			C melody					
1922						Model 22		
1926						Model 26		
1928	Selmerに買収される							
1930						Cigar Cutter		Buffet-Powell
1931							Monopole1	
1932		New Aristocraft						
1934			Naked Lady 10M			Radio Improved		
1935			26M 30M	Zephyr				
1936					Committee	Balanced Action		
1940				Super 20				SA
1941		400						
1947						Super Balanced Action	Monopole2	
1950			28M					Dynaction
1954						Mark 6		
1957								Super Dynaction
1958		米Selmerに買収される						

まず、1846年にAdolphe Sax社が特許を取得し、20年間の専売特許の権利を得る。特許が失効すると同時に、Buffet Cramponはサクソフォンの製造を始める。その後、アメリカのConn社は「Worcester」というモデルを発売する。このモデルは、アメリカで初めて製造されたサクソフォンであり、Adolphe Sax社で作られていたサクソフォンのコピーであった¹²。

その次に発売される、薄い灰色で示してあるBuescher「True tone」、[「New Aristocraft」、Conn「New wonder」、[「C melody」、[「Naked Lady」、[「10M」、[「26M」、[「30M」]は、20世紀初頭にアメリカで栄華を誇ったアメリカのメーカーによるモデルであり、この頃世界中のサクソフォンのシェアを支配していた。

そして、黒色で示してあるSelmerの「Balanced Action」の登場は、サクソフォンの楽器史において最も重要なターニングポイントである。画期的なキィシステム¹³が用いられたことにより音色が均一になり、ジャズの奏者たちがこぞって使い始めたことをきっかけに、全世界に浸透し、栄華を誇り、アメリカのサクスメーカーは衰退へ追いやられた。Selmerはその後、「Balanced Action」をもっと改良した「Super Balanced Action」や「マーク6」を発売し、他のメーカーとの差をさらに広げる。

「Balanced Action」のキィメカニズムの専売特許は、Selmerによって1970年まで守られていたため、他の会社はそれに対抗するために、濃い灰色で示されているBuescher「400」、Conn「28M」、King「Super 20」、Martin「Comittee」といったモデルを発売するものの、Selmerの勢いには勝てず、次第に衰退していつてしまう。

Couesnonの「Monopole」は、ジャズの奏者にもクラシックの奏者にも愛用されていたが、製造数が少なくなり次第に製造されなくなる。

最終的に、Buffet Crampon以外は、Selmerに買収されたり、製造数が少なくなったりしたことが原因でSelmerが取得したメカニズムの特許満了を待たずしてサクソフォンの製造を止めてしまった。

4. 奏者の使用楽器について

4-1. 現時点で分かっている奏者の使用楽器

この章では、ラッシャーとミュール、またジャズやジャズ以前のポピュラー音楽において著名なサクソフォン奏者たちの使用楽器を調査したもの整理した。使用楽器のモデルまで分からないものはメーカー名のみ記してある。また楽器の製造において影響を与えた奏者の証言などは、現時点で分かる範囲で記述してある。

○Marcel Mule (生没年: 1901-2001) (活動時期: 1914-1965)

・フランス出身のサクソフォン奏者。

8歳の時にサクソックスをはじめて、22歳でパリギヤルド・レピュブリケーヌ吹奏楽団に入り、1942年にはパリ音楽院のサクソフォン科の教授に就任。パリ・サクソフオーン四重奏団を結成。ミュールのために多くの曲が作曲され、初演、編曲を務めた。

・1914～1919年:Buffer Crampon - Buffer Crampon、1920年～1931年:Selmer - Model22、1931年～1948年:Couesnon - Monopole1、1948年～1952年:Selmer - Balanced Action,Super Balanced Action、1953

年～1965年: Selmer - Mark6

・ミュールの証言¹⁴

はじめはビュッフェ・クランポンを使っていました。しかし、セルマー社が1920年頃に最初の楽器を出すまで、私はこの楽器で演奏しました。私はセルマー社の楽器の改良に非常に感銘を受け、その時から1931年まで、セルマーで演奏したのです。その年、ケノン社から彼らの楽器を吹いてみるように依頼され、1948年までそれで演奏しました。それからマークVIとして知られる、セルマー社の新しい楽器の開発の過程に携わる機会を持ちました。改良すべき点はたくさんあり、楽器の品質をよくするために我々は努力しました。品質の改良は決して終わりはありません。またこの仕事はとても難しく設備を整えたりする面で会社としては莫大なお金がかかることもお分かりでしょう。ともかく私はマークVIには大変満足しました。

ミュールはCousnonとSelmerのMark6のアドバイザーをしており、Mark6の出来にはとても満足していたことが分かる。

○Sigurd Rascher (生没年: 1907-2001) (活動時期: 1920-1977)

・ドイツ出身で、後にアメリカに帰化したサクソフォン奏者。

世界各国で演奏活動を行い、共演したオーケストラは世界中で250を超える。1969年にはラッシャー・サクソフォン四重奏団を組織し、アルトを担当した。また現在までにおよそ200の作品を献呈され、初演を行っている。教育者としては、ジュリアード音楽院、マンハッタン音楽院、イーストマン音楽学校の各校で教鞭をとり、多くの優秀なサクソフォニストを輩出した。

・1920～1977年: Buescher

・ラッシャーの証言

偉大な巨匠の音楽を忠実に表現する上で、私にとってブッシュャー社のサクソフォンは不可欠です。このサクソフォンは発明者のアドルフ・サクスの理想である、弦楽器の柔軟性や、木管楽器の音の柔軟性、金管楽器の音量がある。他の楽器メーカーよりも完成度が高いことは言うまでもありません

と、Buescherの楽器を賞賛している。

○Cecil Leeson (生没年: 不明) (活動時期: 1924-1971)

・アメリカ出身でアメリカで活躍したサクソフォン奏者。1955年に博士号取得。ノースウェスタン大学の教授を勤める。ポール・クレストンより「ソナタ 作品19」を献呈される。

・1937年～1971年: Martin - Hand-Crafted Committee 1 or 2

○Smith & Holmes (活動時期: 1905-1930)

・アメリカで活躍したカルテットグループ。

Clay SmithとG.E.Holmesが結成。音楽的でサクソフォン本来の豊かな音色を目指し、台頭するジャズ

音楽には批判的な姿勢をとっていた。何十ものクラシック曲を取り上げ、行進曲から二重奏曲、スクールバンド向けの曲などの作曲も手がけた。

・1905年～1930年: Buescher（全員がBuescherの楽器を使用）

○Rudy Weidoeft（生没年: 1893-1940）（活動時期: 1915-1939）

・アメリカでジャズより前の時代にポピュラー音楽を演奏したソリスト。彼の音楽はラグタイム、ポピュラー、ワルツ、ブルースから、賛美歌やワルツなど親しみやすいクラシック音楽までに至り、絶大な人気を誇った。彼の演奏する、Cメロディーサクスはピアノの読み替えなしで演奏することが出来たため、一般家庭に急速に普及した。

・1915年～1918年: Buescher - TrueTone、Conn - Cmelody、1919年～1926年: Selmer - Model22 or 26、1927年～1939年: Holton

・ConnのCmelody Saxは、手ごろな価格であり、ルディ・ウィードフトが演奏することで人気を博し多くの家庭で演奏された。

○Jean Moeremans（生没年不明）（活動時期: 1905-1918）

・ジョン・フィリップ・スーザ（John Philip Sousa, 1854-1932）¹⁵が率いた吹奏楽バンドのソリスト。

・1905年～1918年: Conn

○Brown Brothers（活動時期: 1910-1930頃）

・アメリカの6人組のグループ。ラグタイム、ヴォードビル、サーカス、ミュージカルなど多彩なジャンルで活躍した。《ブルフログラグ》、《アメリカン・パトロール》のレコードは大ヒットし、全米にサクソフォンの名前を定着させた。

・1911年～1927年: Adolphe Sax、Couesnon、Conn、Buescher

○Sidney Bechet（生没年: 1887-1959）（活動時期: 1919-1959）

・アメリカ出身のサクソフォン奏者。主に活躍したジャンルは、ニューオーリンズ・ジャズ、ディキシーランド・ジャズ。

・1919年～1948年: Buescher、1949年～1959年: Couesnon

○Coleman Hawkins（生没年: 1904-1969）（活動時期: 1922-1965）

・アメリカ出身のジャズサクソフォン奏者。スウィング世代のミュージシャンとしては珍しく、第2次大戦後はビバップの分野で活躍。

・1921年～1944年: Conn、1945年～1965年: Selmer - Super Balanced Action

○Ben Webster（生没年: 1909-1973）（活動時期: 1932-1970）

・アメリカ出身のジャズテナーサクソフォン奏者。

・1932年～1944年: Conn、1945年～: Selmer - Super Balanced Action

○Lester Young (生没年: 1909-1959) (活動時期: 1927-1959)

・アメリカ出身のジャズサクソフォン奏者。テナーサクソ奏者であり、クラリネット奏者としても活躍した。

・1933年～1949年: Conn、1950年～1959年: Selmer - Balanced Action

○Charlie Parker (生没年: 1920-1955) (活動時期: 1937-1950)

・アメリカ出身のジャズサクソフォン奏者。アルトサクソ奏者であり、ビバップの分野で主に活躍した。

・1937年～1947年: Conn、1948年～1950年: Martin - Handcraft、1950年～1955年: Selmer - Balanced Action、King - Super20

○Art Pepper (生没年: 1925-1982) (活動時期: 1940-1977)

・アメリカ出身のジャズサクソフォン奏者。ウエストコースト・ジャズの中心的な人物として活躍した。

・1940年～1949年: Martin、1950年～1971年: Selmer - Mark6、Crampon - Super Donation

○Dexter Gordon (生没年: 1923-1990) (活動時期: 1945-1976)

・アメリカ出身のジャズサクソフォン奏者。テナーサクソ奏者であり、ビバップ・ハードバップの分野で主に活躍した。

・1945年～1957年: Conn、1958年～: Selmer - Mark6

○Stan Getz (生没年: 1927-1991) (活動時期: 1944-1988)

・アメリカ出身のジャズサクソフォン奏者。テナーサクソを演奏し、1950年代のクール・ジャズ、1960年代のボサノヴァを取り入れたジャズなどで人気を博した。

・1944年～1955年: Selmer - Balanced Action、Selmer - Super Balanced Action

○John Coltrane (生没年: 1926-1967) (活動時期: 1946-1967)

・アメリカ出身のモダンジャズを代表するサクソフォン奏者。1950年代のハード・バップ、1960年代のモード・ジャズ、フリー・ジャズの分野でも活躍。ソプラノサクソ、アルトサクソ、テナーサクソを演奏した。

・1946年～1955年: Selmer - Balanced Action、1956年～1967年: Selmer - Mark6

○Paul Desmond (生没年: 1924-1977) (活動時期: 1946-1975)

・アメリカ出身のジャズサクソフォン奏者。クールジャズ・ウエストコーストジャズを代表する奏者

の1人。

・1946年～: Selmer - Balanced Action

○Cannonball Adderley (生没年: 1928-1975)(活動時期: 1955-1975)

・アメリカ出身のジャズサクソフォン奏者。アルトサクスを奏者であり、ソウル・ジャズ、ファンキー・ジャズの分野で活躍した。

・1956年～: King - Super20

18名の奏者の使用楽器を調査したところ、以下のことが分かった。

・Balanced Actionの登場と共にSidney Bechet、Cannonball Adderley以外はこぞってSelmerの楽器を使用している。

・クラシックの分野で活躍した奏者の中では、ミュールだけがSelmerの楽器を使っている。

・ラッシャーは、終生Buescherの楽器を愛用し続けた。

・アメリカのジャズ以前のポピュラー音楽で活躍した奏者たちは、BuescherやConn、Adolphe Sax、Cuesnon、Selmerなどを様々なメーカーの楽器を使っているが、比較的Buescherの楽器を使っている奏者が多い。

・ジャズの著名な奏者たちは、Sidney Bechet、Cannonball Adderley以外は、全員途中、または始めからSelmerの楽器を使用しており、Selmerの楽器を使う前はConnを使用している奏者が多い。

4-2. 考察

1888年にConnが初めてアメリカのサクスを作り、それはAdolphe Sax社のコピーであった¹⁶。その楽器を作った当時のConnの工場長であるフェルディナンド・ブッシャーが独立し、後にBuescherを設立し楽器を作り始める。なぜConnとBuescherが決別したのかまでは調べきれていないが、Connはエドゥアール・ルフェーブルやルディ・ウィードフトをアドバイザーとして起用し、主にジャズやジャズ以前のポピュラー音楽の分野の奏者たちに人気の楽器となるため、ブッシャーが目指す方向性とは違ったのではないだろうか。また、ラッシャーは前述の通り、「このサクソフォンは発明者のアドルフ・サクスの理想である、弦楽器の柔軟性や、木管楽器の音の多様性、金管楽器の音量があり、他の楽器メーカーよりも完成度が高いことは言うまでもありません」とブッシャー社の楽器を賞賛しており、当時クラリネティストとして軍楽隊やオーケストラで音の不調和を感じていた、サクスの発明者であるアドルフ・サクスが目指した「軍楽隊とオーケストラのどちらでも大きな役割を持ち、木管の音色と金管の音量と弦楽器のしなやかさを兼ね備え、これら3種の楽器群の響きを結びつけることの出来る楽器を作りたい」という構想と同じであること、またアドルフサクス社のコピーの楽器を作ったことから、ブッシャーはそれを受け継ぐ意志があり、ゆえに保守的であり、ラッシャーはその精神に賛同しBuescherの楽器を使い続けていたと言える。

また、アメリカで人気を博したジャズ以前のポピュラー音楽の奏者たちの中で、クラシカルな活動をしていたSmith & HolmesがBuescherの楽器を使っていたこともそのことが窺える。

一方でいろんな楽器メーカーを渡り歩き、CouesnonやSelmerのMark6のアドバイザーをしていたミュールは、最終的にジャズの奏者と同様にSelmerの普及に大きく影響を与えた。ミュールがクラシックの分野で他の奏者に与えた影響は大きかったと考えられ、もしミュールが他のメーカーのサクソスを使っていたら、Couesnonやアメリカのサクソメーカーが衰退してしまうことはなかったかもしれない。

5. おわりに

本研究ではラジオ奏法に対する見解の違いや、使用楽器メーカーからラッシャーとミュールの音楽的傾向の違いを比較した。現段階ではその他に、2人は使用したマウスピースの嗜好も相反するものであったことが分かっている。1940年頃、ビッグバンドジャズが登場し大音量が必要になったことなどをきっかけに、マウスピースの流行が内部の形状が丸いものから狭く鋭い形状のものへと変化した。その時もラッシャーは流行に乗らず内部の形状が丸いものを使い続けたことが分かっている。マウスピースの形状が大きく変化した時期とBalanced Actionの登場の時期が限りなく近いことから、Balanced Actionの登場もマウスピースの変化に大きく影響を与えたと考えている。今後はそのことについても文章化していきたい。

他には、より多くの奏者の使用楽器を調査し、各楽器メーカーの特徴と奏者の音楽性がどう紐づいているのか考察すること、各楽器メーカーのそれぞれの楽器ごとに、その楽器の誕生に与えた影響を広告や歴史などから客観視すること、楽器メーカーの設立や倒産や合併に関してより深く調べること、20世紀に短いスパンで起こり続けたであろう音楽的要求の変化を、クラシックサクソフォンにおけるジャズからの影響という視点で整理すること、楽器発明者のアドルフ・サクソとシガード・ラッシャーとマルセル・ミュールの証言やエピソードや伝記などから、彼らが何を志し、後世に残したかったのかを考察することを中心に研究を進め、サクソフォンの発達史を立体的に文章化していきたい。

註

- 1 ドイツに生まれアメリカに帰化したサクソフォン奏者。クラシックのサクソフォンにとって欠かせない数多くの重要なレパートリーを数多く委嘱した人物。
- 2 フランスのサクソフォン奏者。最も偉大なクラシックのサクソフォン奏者として知られ、彼のために数多くの曲が作曲された。パリ音楽院の教授を勤める。
- 3 特殊奏法。倍音として鳴っている音を強調し、実際の音として鳴らすこと。
- 4 ラッシャーの妻アン・マリによる証言
- 5 1958年インディアナ州エルクハートでのリサイタルでは、イベールの《コンチェルティーノ・ダ・カメラ》の中でいくつかラジオ音域で演奏している箇所がある。
- 6 ミュールの弟子。1932年生まれでアメリカ出身の奏者。パリ音楽院にてミュールに師事。世界各国で演奏会を開き、1964年から36年間アメリカのインディアナ大学の教授を務める。
- 7 フランス語にて行われた対談

- 8 Rousseau, Eugene. *His Life & the Saxophone* (Paris: Jeanne Music Publication, 1982), pp.24-29
翻訳は大室勇一・雲井雅人。
- 9 1953年に録音された、指揮マニュエル・ロザンタル、マルセル・ミュール独奏、パリ・フィルハーモニー管弦楽団による演奏。
- 10 Raschèr, Sigurd M. *TOP-TONES for the SAXOPHONE Four-Octave Range (Third Edition)*. (Tokyo: ATN, inc, 2009), pp.6-7.
- 11 フラジオ音域のこと。
- 12 Leo, van. Oostrom. *100+1 SAXEN de collectie van leo van oostrom fotografie peter cox*: Amsterdam: EditionSax, 2009, p.63.
- 13 次節にて説明を入れる。
- 14 Rousseau, Eugene. *His Life & the Saxophone* (Paris: Jeanne Music Publication, 1982), pp.30-31
- 15 アメリカの作曲家、指揮者。100曲を超えるマーチを作曲。
- 16 Leo, van. Oostrom. *100+1 SAXEN de collectie van leo van oostrom fotografie peter cox*: Amsterdam: EditionSax, 2009, p.63.

参考文献

書籍

- ・ Jackson, A. *Legendary Saxophonists Collection*. Tucson: Keeps Publishing House, 2008.
- ・ Oostrom, Leo van. *100+1 Saxen de Collectie van Leo van Oostrom*. Amsterdam: Edition Sax, 2009.
- ・ Rorive, Jean - Pierre. *Adolphe Sax (1814-1894) Inventeur de génie*. Bruxelles: Gerard klopp, 2004.
- ・ Rousseau, Eugene. *Marcel Mule. His Life & the Saxophone*. Paris: Jeanne Music Publication, 1982.
- ・ マイケル・シーゲル著 諸岡敏行訳 2010 『サキソフォン物語』 東京：青土社

雑誌

- ・ 李源翼 (2022)「イベールのサクソフォン小協奏曲と初演をめぐる真実と3つの改訂版について」『パイパーズ』487 pp.28-34

楽譜

- ・ Ibert, Jacques. *Concertino da camera pour saxophone-alto et onze instruments*. Paris: Editions Musicals Alphonse Leduc, 1935.
- ・ Raschèr, Sigurd M. *TOP-TONES for the SAXOPHONE Four-Octave Range (Third Edition)*. Tokyo: ATN, inc, 2009.

インターネットサイト

- ・ Wikipedia “Sigurd Raschèr”

https://en.wikipedia.org/wiki/Sigurd_Rasch%C3%A8r 最終閲覧日2023年1月10日

・ Saxophone Museum

<https://www.saxophone.org/museum/saxophones> 最終閲覧日2023年 1 月10日

・ The Vintage Saxophone Gallery

<http://www.saxpics.com> 最終閲覧日2023年 1 月10日

・ Encyclopedia of Early Jazz

<https://wiki.earlyjazz.jp/> 最終閲覧日2023年 1 月10日